第３章　大津の農業のいま（大津市農業の現状と課題）

1　農業が盛んなところはこんなところ

大津市はその地形が南北に長く、農業地域が市の南側と北側の両端に集中している点に特徴があります。

北から順にみると、志賀地域では、比良山系を背に琵琶湖にむかって急傾斜の農地が続いています。北部・中部地域では、比叡山と琵琶湖との間にある平野や斜面に農地が分布しています。仰木の棚田に代表される傾斜の強い棚田が見られるのもこの地域の特徴です。東部・南部地域では、一部急傾斜の農地もありますが、大戸川が流れる平野に優良な農地が広がっています。隣の草津市や野洲市、高島市に比べて大津市は平坦な農地が少なく、ほ場整備も県内の他の市町に比べるとあまり進んでいません。

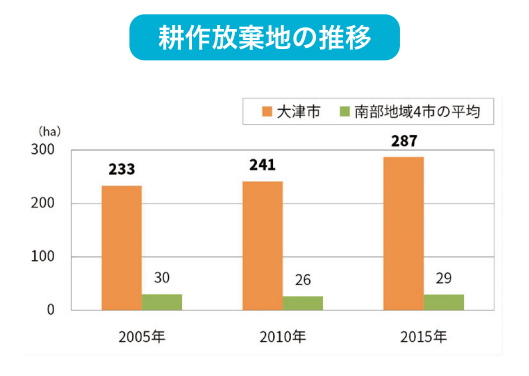
さらに、南側と北側で気候が異なり、農業にも影響を与えています。例えば、年間の平均気温（平成 27 年(2015)- 令和元年(2019)の 5 カ年平均）は南側の大津(萱野浦)が 15.7℃、北側の南小松が 15.1℃で、南小松のほうが少し低くなっています。

また年間降水量も大津 1,499 ㎜、南小松 1703.5 ㎜となっており、南小松のほうが多くなっています。また、北部では冬になると「比良おろし」と呼ばれる比良山系からの強い風の影響を受けることも多くあります。

大津市の農業振興地域

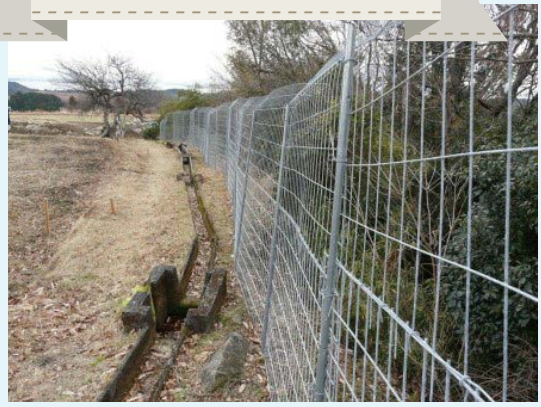
出典：大津市

仰木の棚田

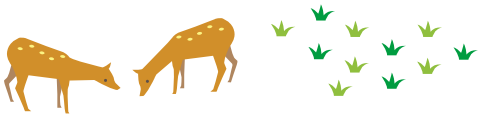


出典：農林業センサス

鳥獣害の防護柵と
イノシシの食害にあった田んぼ



大津市農業の課題①



●生産の効率化の限界

大津市の農地は山間部に多く、広く平坦な農地が限られるため、農地の規模を拡大して生産コストを下げることが容易ではありません。

●鳥獣害対策

山間部に農地が多いことから、シカやイノシシなどの鳥獣による被害が課題となっています。平成25年度における大津市での被害額は年間2,950万円、令和元年度では2,012万円でした。市ではすでに田んぼや畑のまわりに防護柵などを設け対策に取り組んでいますが、さらなる対策が求められています。

●耕作放棄の阻止

高齢化などで担い手が減少し、作付けがなされない耕作放棄地が増えています。大津市は近隣の市と比べて耕作放棄地の割合が高く、これ以上増やさないための対策が必要です。

2 こんな農産物の生産が盛んです

大津市の農業の主力は稲作です。大津市の耕地面積（経営耕地面積、平成 27 年（2015）現在）の 1,449ha のうち、田んぼの面積は 95％です。また稲作は市の農業産出額（平成 29 年（2017））全体の 69％を占めており、主力の作物といえます。

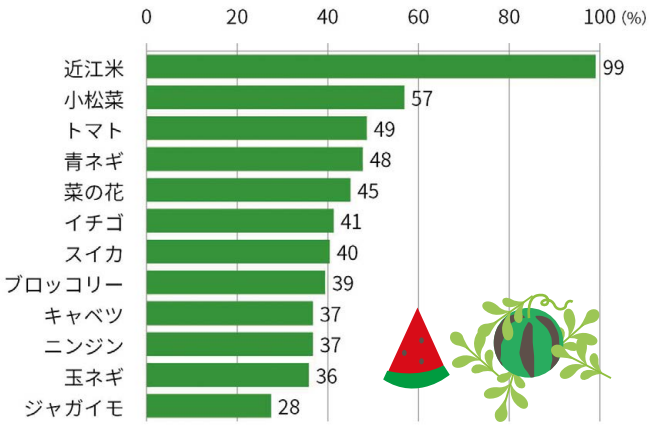
次に、消費地に近い立地を活かした野菜の生産が盛んです。小松菜、キャベツ、トマト、青ネギ、ダイコンなどを挙げることができます。特にスイカ（比良スイカ）は平成 5 年（1993）～6 年（1994）頃から、イチゴは平成 17 年（2005）頃から作付けが増え、市内の直売所で人気を集めています。

その他に養鶏も活発です。市全体の農業算出額のうち 11％を占めており、卵や高級地鶏「近江しゃも」が生産されています。

また市内では環境保全型農業の取り組みも行われており、滋賀県が開発した品種「みずかがみ」を始めとした米づくりなどが各地で見られます。

大津市産の農産物あれこれ

大津市農業の課題②



出典：大津市

●大津市産農産物の認知度

平成27年度に大津市が行ったアンケート調査（109名回答）によると、大津市産農産物として、「近江米」がもっとも知られていました。

大津には小松菜や青ネギ、スイカ、イチゴなどの様々な農産物がありますが、近江米に比べると、あまり知られていないのが現状のようです。今後は、さらに大津市内外に様々な販売先を確保するなど、より認知を高める工夫が必要といえます。